

ザ・コラム
The column

有田 哲文 (編集委員)

通称、LIBOR(ライボ)。ロンドン銀行間取引金利といえば、英国の金融市場で決められる「金利の世界基準」だ。世界のあちこちで企業融資などをするとき「この貸し出しの金利はLIBORプラス0・5%で行きましょう」というふうに使われている。世界の時の基準となっているグリニッジ標準時のように、グローバル金融の真ん中に座っている。

国際金融市場をきちんと反映していると考えられていたこの金利が、不正に操作されていた。そんなスキャンダルがこの夏発覚し、世界の金融業界が大騒ぎになった。

いまのところ不正を認めただけは英銀大手パークレイズだけだが、他にも疑われている銀行は少なくない。かなり前からあったとの指摘もある。1990年代前半に大手金融機関でトレーダーをしていた数理科学者ダグラス・キーン氏は「LIBORは操作されている。そんな見方は当時から、常識のように語られていた」と言う。問題の根は、どこにあるのか。

LIBORの生みの親がいる。そう聞いて訪ねてみた。ミノス・ゾンバナキス氏、86歳。ロンドン金融界で名をはせた元バンカーは、故郷のギリシャ・クレタ島で静かに暮らしていた。

「最初に始めたときは、本当に非公式なものだった。こんなにずっと続くとは、思っていなかった」

69年、イラン政府から8千万ドルの融資を求められた。当時としては巨額で、自分の銀行だけで用立てられる金ではない。一緒に貸そうと多くの銀行に協力を求めて協調融資をまとめた。ただ、一つだけ問題があった。貸出金利をどう一本化するか。契約直前の金利を各銀行に電話で報告してもらい、その平均を出すことにした。これが後

仲間内の緩み、放置の末に

LIBOR不正

のLIBORの原型となった。
「みんないい考えだと思ったんだね。その後、何度も何度も、協調融資のたびに繰り返された。それがだんだんと基準になっていったんだ」

ロンドンに、金融紳士によるクラブの雰囲気が残っていたころだ。仲間内で非公式といってもインチキは許されなかったと、彼は言う。「狭い社会だったからね。お互いがお互いをよく知っていた。誰かをだまそうとすれば、はじき出されてしまう」

LIBORの位置づけが変わったのが、80年代半ばだ。固定金利と変動金利をとりかえる金利スワップなどの金融派生商品(デリバティブ)が広がり、LIBORを基準に使うようになった。とりまとめ役も業界団体の英国銀行協会に委ねられた。

2011年上期の時点では、LIBORに左右される取引の推計は世界で554兆ドル(4京3千兆円)で、日本の国内総生産(GDP)の80倍を上回る。押しも押されぬグローバル金融の物差しになった。しかし、仲間内の非公式な感じは、どこかで残ったようだ。悪い意味で。

規制当局の英金融サービス機構(FSA)が不正の証拠として公表した銀行員同士の電子メールが、その雰囲気を見せている。たとえば、2006年、パークレイズのトレーダーが、同僚の金利担当者泣きついていて、自分の抱える金利のデリバティブで損が出ないようにしたいという。

「今度の月曜日に本当に低い金利が必要なんだ。そうでないと、すごい損が出るかもしれない。どんな助けでもありがたい」金利に手心を加えてほしい、という要望はよその銀行員からも届いていた。これはお礼のメール。

「いっぱい借りができちゃったね！今度仕事が終わったらおいでよ。僕がシャンパンのボトルを開けるよ」

たとえいくつかの銀行が示し合わせたとしても、動かせる金利はごくわずかだ。それでも、デリバティブの取引が巨額であれば、大もうけできる。一方で、不正を働いても、罰則規定もない。

「緩み」を放っておいたツケは、重くのしかかりそうだ。

始まったのは、訴訟ラッシュだ。操作で得をした人もいるが、当然、損をした人もいる。米ボルティモア市が、持っていた金利スワップで損をした可能性があるとして集団訴訟に踏み切ったほか、年金基金や大企業などからの訴訟も想定される。国際法律事務所ハウスフェルドのアソニー・メイソン氏は「金融関係の訴訟としては過去最大の事件になる可能性がある」と語る。

同じアングロサクソンといっても、英国と米国では資本主義の運営の仕方が微妙に違う。米国が法律でしぼり、問題を起こした連中を刑務所に入れることもいとわれないのに対し、英国では、参加者たちが相互に監視し、規律を保とうとする。

LIBORスキャンダルは、そんな古きよき英国はもうどこにもないことを示した。崩壊しているのに、見ないふりをしてきた、という方が正しいだろう。放置すれば、国際金融センターとしての凋落は避けられない。

ロンドン五輪は12日に閉幕するけれど、英国発の金融異聞は始まったばかりだ。